

ビワ生育情報

第 1 0 報
千葉県農林水産部
令和 3 年 7 月号

本年は、着花房率が平年より高く、寒害や果樹カメムシ類の被害も少なかった。春から収穫期にかけて気温が高く、紫斑症や日焼けの発生が見られた。また、収穫期は平年より早かった。

1 本年度産果実の特徴

(1) 収穫期

収穫期を表 1 に示した。暖地園芸研究所における収穫始期、盛期及び終期はそれぞれ、「楠」が 5 月 20 日、5 月 24 日、5 月 27 日、「大房」が 5 月 28 日、5 月 31 日、6 月 2 日、「田中」が 6 月 1 日、6 月 4 日、6 月 8 日であった。収穫盛期は 3 品種共に平年より 7～11 日早く、前年より 2～7 日早かった。

表 1 収穫期（暖地園芸研究所）

品 種	収穫始期（月．日）			収穫盛期（月．日）			収穫終期（月．日）		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	5.20	5.28	5.25	5.24	6. 1	5.29	5.27	6. 5	6. 2
大 房	5.28	6. 2	5.29	5.31	6. 7	6. 2	6. 2	6.10	6. 5
田 中	6. 1	6.11	6. 8	6. 4	6.15	6.11	6. 8	6.19	6.15

平年：平成 3 年～令和 2 年の平均

(2) 果実の大きさ及び収穫量

収穫果実の大きさと品質を表 2、3 に示した。果重は「楠」が 53g、「大房」、「田中」は 3 地区の平均でそれぞれ 76g、75g であり、「楠」は平年の 102%、「大房」は 96%、「田中」は 103%であった。

横径は「楠」が 4.9cm、「大房」、「田中」は 3 地区の平均でそれぞれ 5.2cm、5.0cm であり、「楠」は平年より大きく、「大房」及び「田中」は平年並みであった。縦径は「楠」は 5.5cm、「大房」及び「田中」は 3 地区の平均で 5.5cm であり、「楠」は平年よりも大きく、「大房」及び「田中」は平年並みであった。

果形指数は「楠」が 0.88、「大房」、「田中」は 3 地区の平均でそれぞれ 0.94、0.91 であり、「楠」及び「大房」は平年より縦長の傾向、「田中」は平年並みとなった。

本年の着花房率は平年より高く、寒害を被った幼果が少なかったため、最終的な着果量は 3 品種共に平年より多かった。果樹カメムシ類の被害は少なかった。春から収穫期にかけて気温が高く推移し、強い日差しがあったため、紫斑症や日焼けの発生が見られた。

(3) 糖度及び酸度

糖度は「楠」が 12.8 で平年より高く、「大房」、「田中」は 3 地区の平均でそれぞれ 11.1、10.5 で、「大房」は平年並み、「田中」は平年より低かった。

酸度は「楠」が 0.15、「大房」、「田中」は 3 地区の平均でそれぞれ 0.14、0.29 で、「楠」及び「田中」は平年並み、「大房」は平年より低かった。

(4) 食味

果肉硬度は「楠」が0.53、「大房」、「田中」は3地区の平均でそれぞれ0.58、0.56で、3品種とも平年並みであった。

糖酸比は「楠」が84、「大房」、「田中」は3地区の平均でそれぞれ81、36で、「楠」及び「田中」は平年より低く、「大房」は平年より高かった。

(5) 病害虫及び生理障害の発生

本年は、収穫期までの果樹カメムシ類の飛来数は少なく、産地における被害も少なかった。春から収穫期にかけて気温が高く、強い日差しがあったため、紫斑症や日焼けが発生した。

表2 果実の大きさ

品 種	調査地点	果 重(g)			横 径(cm)			縦 径(cm)			果形指数			
		本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年	
楠	暖地園研	53	52	47	4.9	4.5	4.3	5.5	4.8	4.6	0.88	0.94	0.93	
	青 木	69	77	63	5.0	5.2	4.8	5.4	5.3	5.2	0.93	0.98	0.94	
	大 房	南 無 谷	80	78	73	5.3	5.2	5.2	5.5	5.4	5.5	0.96	0.97	0.94
	暖地園研	78	83	75	5.2	5.4	5.2	5.5	5.5	5.4	0.94	0.97	0.96	
	平 均	76	79	70	5.2	5.3	5.1	5.5	5.4	5.4	0.94	0.97	0.95	
田 中	青 木	72	72	64	4.9	5.0	4.8	5.4	5.4	5.3	0.90	0.92	0.90	
	南 無 谷	79	71	58	5.1	4.9	4.6	5.7	5.5	5.2	0.91	0.90	0.89	
	暖地園研	76	78	68	5.0	5.1	4.8	5.5	5.6	5.4	0.92	0.92	0.90	
	平 均	75	74	63	5.0	5.0	4.8	5.5	5.5	5.3	0.91	0.91	0.90	

果形指数：横径／縦径

平均：3地区の平均値で平年値は平成3年～令和2年の平均

表3 果実品質

品 種	調査地点	糖度(Brix%)			酸度(g/100ml)			硬 度(kg)			糖酸比			
		本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年	
楠	暖地園研	12.8	12.5	12.6	0.15	0.14	0.17	0.53	0.52	0.49	84	91	74	
	青 木	10.9	10.8	12.2	0.13	0.15	0.22	0.55	0.56	0.54	82	78	55	
	大 房	南 無 谷	10.9	10.7	11.6	0.14	0.17	0.15	0.59	0.56	0.53	77	68	79
	暖地園研	11.6	11.4	12.0	0.14	0.18	0.20	0.60	0.58	0.55	84	67	59	
	平 均	11.1	11.0	12.0	0.14	0.17	0.19	0.58	0.57	0.54	81	71	64	
田 中	青 木	9.9	11.2	11.3	0.32	0.29	0.38	0.54	0.55	0.54	31	42	29	
	南 無 谷	9.3	10.5	12.2	0.24	0.31	3.21	0.59	0.56	0.51	38	35	41	
	暖地園研	12.3	11.6	12.8	0.31	0.29	0.30	0.56	0.56	0.00	39	41	42	
	平 均	10.5	11.1	12.1	0.29	0.30	1.30	0.56	0.56	0.35	36	40	38	

糖度：屈折糖度計の測定値、酸度：果汁100ml中の酸含量をリンゴ酸(g)に換算した値

硬度：果実硬度計による測定値、糖酸比：糖度／酸度

平均：3地区の平均値で平年値は平成3年～令和2年の平均(ただし硬度は平成12年～令和2年の平均)

2 最近1年間の気象及びビワの生育状況

令和2年7月～令和3年6月までの月別の気象を表4に示した。平均気温は16.6℃で、平年より1.0℃高く、前年と同程度であった。降水量は年合計が1,602mmで、平年の80%、前年の59%であった。日照時間は年合計が2,061時間で、平年の106%、前年の107%であった。

8、9月は気温が平年より高かったが、花房の発現は品種ごとにばらついた。8月は日照時間が長く、着花房率は3品種とも平年より高かった。11月の気温は平年より高く、開花は平年より早く進んだ。幼果が寒害を受ける最低気温-3.0℃以下の

日がなかったため、寒害の被害は少なかった。1～6月は平年よりも気温が高く、果実の生育は平年より早く進み、収穫期は平年より早かった。

表4 令和2年7月～令和3年6月の気象（暖地園芸研究所）

年	月	気温（℃）			降水量（mm）			日照時間（hr）		
		本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
R2	7	23.9	24.4	23.5	405	194	291	76	169	105
	8	27.2	26.0	27.1	16	144	72	303	217	229
	9	23.9	22.7	24.4	161	250	321	137	145	191
	10	17.4	17.9	19.7	244	250	662	122	137	119
	11	14.8	13.2	13.7	33	148	252	159	145	161
	12	8.4	8.6	9.8	2	85	97	157	165	129
R3	1	6.6	6.0	8.0	77	90	204	175	170	206
	2	9.2	6.3	9.0	67	97	51	207	152	102
	3	12.7	9.2	11.1	177	186	244	166	157	170
	4	14.4	13.9	13.3	129	174	199	227	172	191
	5	18.7	18.0	18.9	199	163	105	171	188	186
	6	21.4	20.9	22.4	95	229	207	163	135	140
平均/計		16.6	15.6	16.7	1,602	2,011	2,703	2,061	1,951	1,929

平年：令和3年4月までは1981～2010年までの平均。令和3年5月18日に気象庁が1991～2020年の30年の平均に平年値を切り替えたことに伴い、令和3年5月以降は1991～2020年までの平均

8月～10月の作業

8月下旬～9月下旬はせん定及び施肥の適期となる。花芽は9月中旬頃には確認できるようになる。10月に入ると発育が進み、花房の形を表し、10月上中旬には摘房・摘らいの作業が始まる。

(1)せん定

8月下旬～9月中旬に行う。徒長枝や混んでいる枝を間引いて、樹冠内部に光が入るようにする。作業の効率化を図るため、二段盃状形の樹形を目指し、低樹高化に努める。

(2)施肥

9月に基肥を施用して花房の伸長、充実を図る。耕土の浅い園では10a当たり成分量で窒素12kg、リン酸9kg、加里9kgを施用し、耕土の深い園では窒素11kg、リン酸9kg、加里7kgとやや少なめにする。

(3)摘房・摘らい

摘房は発育不良の花房や混み合った花房を間引き、1樹の全枝の半数に花房を残す。

摘らいは花房基部から3段目までの小花梗の中から充実した2段を残して他をかき取る。花房の長さが3～5cmの時に摘らいすることで、開花期間を延長させ、寒害の被害を受けにくくすることができる。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室
電話 0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。
<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>